

タイトル	シュメール文学概説 : 冥界にかかわる作品(1)
著者	桑原, 俊一
引用	北海学園大学人文論集, 26・27: 17-41
発行日	2004-03-31

# シュメール文学概説

## — 冥界にかかわる作品(1) —

桑 原 俊 一

キーワード：コスモス，冥界，神話

### はじめに

文化・文明の固有性の一つは、疑いなく民族が連綿として生活の基盤としてきた環境と風土に決定的要因があるといえよう。古代エジプト文明がナイル河の賜物であったとすれば、古代メソポタミア文明はチグリス、ユーフラティス両河の恩恵なしに存在しえなかった。古代の文学活動に限定しても、それを促す原動力は自然と風土が大きく関与していたことは疑いない。自然や風土が多様であればあるほど、そこに住む民族に固有で豊穡な文学、ここでは主として神話や叙事詩、が蒐集されうる。古代メソポタミアの場合、明らかなのは、文学は儀礼や祭儀に関与する作品の他に、民族が置かれてきた自然環境から感得した固有な実像によって創作され、編集されてきた、ことである。したがって文学作品は彼らが培った生活文化の鼓動と精神の表出であるといつてよい。宇宙開闢や人間の創造に関する神話は中でも最も興味を注がれるテーマである。われわれの住む大地がいつどうして創造され、われわれはどこから来て、どこに行くのか。生と死の問題は古代であれ現代であれそれが謎であるだけに、広く文学のテーマの場であり続けているのである。

死者が赴くところ — 他界 — は一般的に冥界、冥府、黄泉、陰府などと呼称されたりする。それは死の現実と墓所に関わる儀礼から生み出された非現実的世界でもある。しかしながら他界は想像やイメージとして、神

話や叙事詩、さらに宗教観に特有な非日常的世界と把握されるばかりでなく、むしろ人間の意識に普遍的に感受できる世界であるともいえる。

古代東地中海ならびに西アジアにおける他界に関する神話や宗教には共通する世界観が認められる。古代ギリシアの「死者の国」、キリスト教が体系化した地獄観、そしてイスラームの終末論的冥界には叙述とイメージにおいて共通するモチーフが多い。しかしながら本稿ではこの地域の冥界に関する比較検討を試みるものではなく、この地域の他界観を把握する上で前理解となる古代メソポタミア文学、とりわけシュメール文学作品を概説する。

古代メソポタミアには他の古代世界同様、冥界をテーマとして取り扱う作品が意外に多い。これらの文学が紡ぎ出す作品を通して、この地域の風土と環境に生きた人々が関心を寄せた豊饒な世界の一端を看取することができる。しかし作品は古代の遺丘から出土した粘土板に書かれていたため、5000年ほど前の人々の文学作品を今日われわれも読むことができるという特権を与えてくれる一方、粘土板の散逸と欠損部分もあって必ずしも十分なテキストの校訂ができていないという限界もあることを理解しておかなければならない。

よく知られている神話や叙事詩から枚挙すれば、シュメール語で書かれたものとして、『イナンナの冥界下り』、『ギルガメシュ・エンキドゥと冥界』、『ドゥムジの夢』、一群の「ダム」テキスト、『ドゥムジの死』、『ギルガメシュの死』などがある<sup>1</sup>。ここで取り扱う文学には既に邦訳と解説がつけられたものもあるので<sup>2</sup>、以下これら概説する作品は物語の粗筋も既に邦訳があるものについてはそれに譲ることにする<sup>3</sup>。

一般的にシュメール文学<sup>4</sup>は二つの文学群に分類することができる。つまりシュメールの南部に位置する都市エリドゥと関係する伝承「エンキ」群と北部シュメールの都市ニップールと関わる伝承「エンリル」群である。冥界と関連するテキストの殆どはエンリル群に属することから、冥界に関する文学伝承の維持と拡大は北部地域で担われたものと思われる。

## 1. 神話と叙事詩

### 1.1. 『イナンナの冥界下り』<sup>5</sup>

このテキストは、アッカド語版『イシュタルの冥界下り』<sup>6</sup>の資料となったが、400行をこえる作品であり、冥界に関するシュメール語作品としては『ギルガメシ、エンキドゥと冥界』と並ぶ傑作である。1980年に出された校訂テキストにおいてKramerが結論し<sup>7</sup>、またJacobsenによって踏襲されたこの作品の原因譚は、季節の循環、つまり雨季と乾季、収穫期と休眠期の概念に認められる。この物語の結末はこの作品が季節ごとの循環に基づく祭儀ドラマであったことを示唆している<sup>8</sup>。死神となって冥界に拘留された女神イナンナ（Inanna）が地上界に再び帰還するためには代理人を必要とした。雨季と乾季という気候風土のメソポタミアを考慮すると、牧神ドゥムジは春の穀物の収穫が終わるころ、家畜が肉の貯蔵のために屠殺されることの反映である。この季節の循環を取り込む原因譚的文学手法は「ドゥムジ」関連文学や『エヌマ エリシュ』（宇宙創成神話）といったシュメール・アッカド文学に固有なものではなく、東地中海全域の文学作品に広く確認されている。

物語は天の女神イナンナと牧神ドゥムジ（Dumuzi）<sup>9</sup>、さらに冥界の女王エレシュキガル（Erškigal）を主な登場人物として展開する。豊穰と愛さらに戦いの女神であるイナンナは作品の中では冥界の女王エレシュキガルの夫グガルアンナ（Gugalanna）の葬送の儀に参列するため、冥界に下っていくことになっているが、本来の理由ははっきりしない。この世と冥界は堅固な七重の門で隔てられている。

イナンナはラピスラズリの冥界の宮殿に近づいたとき、  
冥界の入り口で悪事を企んだ。>

冥界の門に向かって悪いことばを叫んだ――

「門を開けなさい、門番よ、門を開きなさい！」

門を開けなさい、ピティよ、門を開きなさい。わたし一人（中に）入

りたいから。」<sup>10</sup>

イナンナは冥界の礼拝法規に従い、王冠も衣類もそして飾り物も取り上げられながら、7つの門を通り過ぎていく。素裸にされながら冥界の女王エレシュキガルの前に立つ。冥界の裁判官（裁判長はエレシュキガル）はイナンナに判決を下す。「死の目」、「怒りの言葉」、「罪の叫び」を浴びせるとイナンナは死体になり、釘に掛けられる。イナンナ救出にはエンキの知恵が必要であった。エンキは自らの爪から垢を取り出し、クルガルラ（祭司）とガラトゥル（祭儀の聖歌者）を作り出し、冥界に向かわせる。エンキの策略によってクルガルラとガラトゥルは「命の食物」と「命の水」をイナンナの死体にふりかける。イナンナは地上に昇っていかうとするが、冥界には代理人なしに地上に戻すことはできないという掟のため代理者を探すことになる。イナンナは大小のガルラ霊に伴われ、冥界から地上に上って行く。都市から都市と代理者を捜し求めるが、イナンナの死を嘆き、喪に服している彼らを代理者とすることはできなかった。イナンナはクラブの野原（ウルク市の一区名）で、夫であり牧神でもあるドゥムジに邂逅する。

ドゥムジはすばらしい衣服をきていた。気高く腰かけていた。

ガルラ霊たちは彼の〈小屋〉に押し寄せ、

……

彼女（イナンナ）は彼（ドゥムジ）を凝視した。死の目で。

彼に語った。怒りの言葉を。

叫んだ。罪の叫びを。

「さあ、お前たち、彼を連れて行きなさい！」と<sup>11</sup>。

妻の冥界拘留をよそに心配もしない夫ドゥムジの不遜さのゆえに、イナンナは妻の代理者として夫を冥界に連行させる<sup>12</sup>。ドゥムジは義兄、つまりイナンナの兄である太陽神ウトゥ(Utu)に懇願し、ガルラ霊たちからなん

とかして逃れようとする。ドゥムジは手足を蛇に変身させてくれるようウトゥに涙ながらに訴える。伝承系統の異なる他の2つの断片が明かにする物語の結末によれば、ウトゥはドゥムジの嘆願を聞き入れ、ガルラ霊たちから逃れて姉ゲシュティナンナ（Gestinanna）の所に隠れる。しかし、それも結局のところガルラ霊たちに捕捉され、打ち殺される。ゲシュティナンナは弟の死を嘆く。きわめてテキストの破損の大きい断片ではあるのだが、

「あなたが半年、あなたの姉さんが半年、  
あなたが（元気）に動きまわっている間は、  
[あなたが倒れ伏すのです]。[ ]  
浄らかなイナンナはドゥムジをその身代わりに与えた。  
浄らかなエレシュキガルよ、  
あなたの讃歌を（歌うこと）はすばらし<sup>13</sup>。」

ここで物語が終わることは確かであろう。

作品の主題は、イナンナとエレシュキガルの対決、さらに変身や代償死のモチーフが絡まって展開される。物語の展開はメソポタミアの環境と生活が反映した結果であることは容易に推察できる。倉庫から穀物がなくなる時期にイナンナは冥界に下り、死んで木釘に掛けられるが、エンキ（Enki）が命の草と水とで蘇えさせる。メソポタミアの春は大河の水が大地を潤し、砂漠も運河と灌漑によって緑を取り戻す。穀物は育ち、実をつけ刈り入れられて倉庫に蓄えられる。家畜も繁殖する。やがて今度は肉の貯蔵のため家畜が屠殺される。これが牧神ドゥムジの死である。

しかし、このように物語を季節の循環から解釈しようとする試みは作品の一面を指摘することはできても、この作品がもつ文学的筋書きの十全な理解を保障するものではない。この物語の背景をいかに理解しようとも、確かに言えることは、物語の作者は「誰も見ることもなく、いまだ誰もそこから上昇した者もない他界」というテーマを見事に描ききることに

成功しているということである。

### 1.2. 『ギルガメシュ、エンキドゥと冥界』<sup>14</sup>

シュメール・アッカド叙事詩は二つの異なる伝承をもつ：英雄伝承と祭司伝承である。Jacobsenによれば『ギルガメシ、エンキドゥと冥界』は祭司伝承に属するものであるり、死に行く神ドゥムジ崇拝を想起させる<sup>15</sup>。アッカド語版『ギルガメシュ叙事詩』には少なくとも5つのシュメール語版に対応する独立した物語が存在すると認められている。Gaddが1933年にウル出土のテキストを公刊して以来、シュメール語作品『ギルガメシュ、エンキドゥと冥界』はアッカド語版『ギルガメシュ叙事詩』の書板12に当たると確認されてきた<sup>16</sup>。

『ギルガメシュ、エンキドゥと冥界』は3部から構成される：1. 序章、2. フルップの木の話、3. 冥界に関わる話である。序章は冥界がエレシュキガルに贈られたという宇宙開闢神話に始まる。フルップの木の話は序章と冥界話を繋ぐ機能を果たしている。すなわち冥界話はフルップの木から造られたブック (*pukku*) とメックー (*mekku*)<sup>17</sup> を冥界に落としてしまうギルガメシュの嘆きに端を発している。われわれの関心はしたがって第三の冥界に関する話になる。この部分はほぼ逐語的にアッカド語に翻訳されている。エンキドゥ (Enkidu) はブックとメックーを取り戻そうと冥界に下る。

「わたしのブックは冥界に落ちてしまった。誰がそれを取り戻してくれようか。」

わたしのメックーはガンジール (冥界の大門) に落ちてしまった。

誰がそれを取り戻してくれようか。」

彼 (ギルガメシ) の僕エンキドゥは言う。

「わが王よ、どうしてお嘆きになられるのですか。なぜにお心を悲しまれるのですか。」

この日わたしが冥界からブックを取ってまいりましょう。

あなたのメックーはわたしがガンジイルから取ってまいりましょう。」  
ギルガメシはエンキドゥに答える。  
「もしもこの日おまえが冥界に下っていくなら、  
おまえに忠告しよう。わたしの忠告を受けとめよ<sup>18</sup>。」

9 箇条の忠告がされる、つまり「きれいな衣服を身につけてはならない。上品な軟膏を塗りつけてはならない。……足にサンダルを履いてはならない。愛する妻に接吻をしてはならない。」などである。しかしエンキドゥはギルガメシュの忠告に従わなかったため冥界に囚われることになる。ギルガメシュはエンリル (Enlil) と月神シン (Sin) では適わず、エンキに頼ると、エンキは太陽神ウトゥ<sup>19</sup> に命じて、冥界に穴を開けさせるとエンキドゥの霊が風のように出てきて、ギルガメシュとエンキドゥは抱擁と接吻を交わす。ギルガメシは躊躇するエンキドゥに冥界の掟を聞きただす。問答形式で両者の対話が続き、冥界に下った死者たちの暮らしぶりが描写される。このように具体的に描出される冥界の運命は他の冥界に関わる文学作品に類例をみないほど際立っている。メソポタミアの宗教観によって死後の運命が具体的に描かれる。一例を挙げよう。

「おまえは息子が一人いる者を見たか。見ました。どんな暮らしぶりか。  
壁に打ち込まれた釘に向かって激しく嘆いています。  
息子が二人いる者を見たか。見ました。どんな暮らしぶりか。  
二つのブロックに腰かけて、パンを食べています。  
息子が三人いる者を見たか。見ました。どんな暮らしぶりか。  
荒野に持ち運ばれた皮袋から水を飲んでいきます。  
……  
息子が七人いる者を見たか。見ました。どんな暮らしぶりか。  
神々の同伴者のように、椅子に座して、音楽を聴いています<sup>20</sup>。」

子供（息子）の多いほうが少ない者より冥界では幸いな生活を過ごすこ



とができるが、これは明らかに部族社会の制度がそのまま冥界においても適用されることを意味する。様々な事例が同様な問答形式手で繰り返される。

「戦に斃れた者を見たか。見ました。どんな暮しぶりか。  
父親は頭を抱きかかえ、妻は嘆き悲しんでいます。  
誰も世話する者のいない人の霊を見たか。見ました。どんな暮しぶりか。  
通りに投げ捨てられた残りものの糟を集めて食べています。」<sup>21</sup>

冥界の運命は生前の行為によってではなく、死者供養が滞りなく行われたかどうかにより差異が生じることが大きな特色といえる。ギルガメシュとエンキドゥの問答は謎めいた応答で締めくくられる。

「火をつけられた者を見たか。見ました。どんな暮しぶりか。  
その者の霊はありません。煙が天に昇りました<sup>22</sup>。」

### 1.3. 『エンリルとニンリル』<sup>23</sup>

この神話は154行から構成され、テキストの保存状況はよい。その主要な目的は神々の起源を説明するところにある。つまり原因譚的物語である。若いエンリル神は運河で沐浴をする若い女神ニンリルに出会う。

当時、娘は産みの母に忠告されている。(そして、このことを彼女に警告する)。

ニンリルはヌンバルシェグヌ(Nunbarsēgunu)に忠告されている。(そして、このことを彼女に警告する)。

「川は清らかだ。淑女よ、川は清らかだ。そこで沐浴しなさい。

ニンリルよ、おまえはイヌンビルドゥ(Inunbirdu)の岸に向かって行きなさい。

（彼）の目は輝いている。主人（彼）の目は輝いている。彼はおまえを見ている。

偉大なる山、父なるムッリル（Mullil）神、（彼）の目は輝いている。彼はおまえを見ている。

羊飼い、……、運命を定める者、（彼）の目は輝いている。彼はおまえを見ている。

彼は直ちにおまえと交わり、おまえに接吻する。」<sup>24</sup>

エンリルは彼女を誘惑し、妊娠させてしまう。神々の議会はエンリルに評決を下し、彼はニップルを離れ冥界へ旅立つことになる。ニンリルもまた彼の子供である月の神、ナナスエン（Nanna-Suen）、を抱えながらエンリルを追う。物語はつづいて、ニップルを離れたエンリルとニンリルは冥界で、まず主門の守衛と出会い、そこを通過する。彼らは続いて川に遭遇し、渡し守によってその川を横断することでやっと冥界に到達する。ここでの主要なテーマは、いかにエンリルが姿を変え、主門の男、冥界の川の男そして渡し舟の男となったかということである。

エンリルは大門の男に言う。

「大門の男、門の男。

錠前の男、聖なる門の男。

おまえの淑女ニンリルがここへ来る。

彼女がおまえに私のことを訊ねたら、

おまえは彼女に私の居所を言ってはならない。」

ニンリルは大門の男に言う。

「大門の男、門の男。

錠前の男、聖なる門の男。

おまえの主人ムッリルはどこに行きましたか」と彼に訊ねる。

エンリルは大門の男として答える。

「私の主人はそれについて許可をなさいませんでした。

エンリルはそれについて許可をなさいませんでした<sup>25</sup>。」

ニンリルはエンリルに騙され、変身の度ごとに子供をもうけることになる：メスラムタエア (Meslamtaea), ニナズ (Ninazu), とエンビルル (Enbilulu) である。冥界に下ったナナとエンリルそしてニンリルは子供たちを彼らの代理とすることで、地上への帰還が許されたものと思われる<sup>26</sup>。これと類似する冥界の門、川や渡し守の描写はアッカド語テキストの『ギルガメシュ叙事詩』や『皇太子の幻』に出てくることが想起されよう。しかしながら、『エンリルとニンリル』に見られる冥界にいたる描写は他の作品と異なる。ここでは川や渡し守に出会う前に門を通過しなければならないが、他のテキストでは川と渡し守は門の外側に位置していると推測される。

この神話は冥界における神々の系図と地下界についての情報を与えてくれる。地界の神々であるメスラムタエア、ニナズとエンビルルは少なくとも二つの異なる伝承系統をもつ<sup>27</sup>：グガルアンナ-エレシュキガル系統<sup>28</sup>とエンリル-ニンリル系統<sup>29</sup>である。またこの物語は、エンリルとニンリルがメスラムタエア——ネルガル (Nergal) の名称をもつ——とニナズの正当な親神であることを確定するものである。

#### 1.4. 『ドゥムジの夢』<sup>30</sup>

保存状況が良い260行から構成される物語である。『イナンナの冥界下り』の続編か、あるいは補遺であった可能性が指摘されている<sup>31</sup>。しかし、この物語は『イナンナの冥界下り』と共通するモチーフをもった独立した作品と捉えるほうがよさそうである。ドゥムジは代理人を用意することで救出され、悪鬼らから遁れるというモチーフは両者の物語を構成する主要な描写となっている。つまり、これらのモチーフはイナンナ-ドゥムジ文学群に共通する文学的特徴で、しかも季節の循環と死に行く神という主題を基軸にしながら物語を展開している。

『イナンナの冥界下り』の終章において、テキストの破損はあるものの、

ほぼ以下のように推測できる。イナンナは代理としてドゥムジを冥界に送るが、ドゥムジは半年間地上の生活に戻る。というのもドゥムジの姉ゲシュティナンナは自ら半年の間ドゥムジに代わって冥界に下るからである。一方『ドゥムジの夢』はその序章において、ドゥムジの死を予告する叙述に続いて、彼は眠りに陥るのだが、それは悪夢であった。姉ゲシュティナンナは弟の夢は死の予兆であると解く。

「弟よ、おまえの夢は好ましいものではない。それは確かだ。

ドゥムジよ、おまえの夢はき好ましいものではない。それは確かだ。

……

……

羊の家で子羊を掴まえる鷲はおまえの頬を打つ邪悪な者（である）。

生垣の葦の中で雀を掴まえる鷹はおまえに向かって垣根をく乗り越えてくる>大きな悪鬼（である。）

攪乳用の大桶が置かれていた。ミルクは注がれなかった。杯は置かれていた。ドゥムジは死んだ。羊の囲いは風の只中で作られた。（その意味は）

おまえの手には手錠が掛けられ、おまえの腕には腕錠で結ばれるだろう<sup>32</sup>。

それに兄弟姉妹の会話と友人（名前は明らかでない）との対話が続く。その後、物語は悪鬼らのドゥムジの搜索へと展開する。最初、悪鬼らはゲシュティナンナからドゥムジの隠れ家を知ろうと賄賂を贈ろうと企むが失敗に終わる。しかしながら、ついに彼らはドゥムジの友人に賄賂を贈って彼を裏切らせることに成功する。

「さあ！彼（ドゥムジ）の友人のところへ行こう！」

その日に彼の友人のところへ、

彼ら（悪鬼）が水を湛えた川を提供したところ、彼はそれを受け取っ

た。

彼らが穀物を実らせる畑を提供したところ、彼はそれを受け取った<sup>33</sup>。

ドゥムジはどうにかして逃れようと隠れ処を変えるが荒野の溝で拘束されることになる。彼は太陽神、ウトゥ、つまりは彼の義兄に懇願する。ガゼル(すばやく草原を駆け抜ける小形のアンテロープの総称)に変身させてくださいと<sup>34</sup>。

「ウトゥよ、あなたはわたしの義兄です。わたしはあなたの妹の夫です!

.....

.....

あなたがわたしの手をガゼルの手に変えてくださり、

あなたがわたしの足をガゼルの足に変えてくださり、

わたしを悪鬼どもから逃れさせてください。

わたしの命を救って、クビレシュディルダレシュ(KU-bireš-daldareš)へ(逃れさせてください)。」

ウトゥは彼の涙を受け入れた<sup>35</sup>。

このようにしてドゥムジは悪鬼から遁れるが、引き続き執拗な追跡にあう。ここでシュメール・アッカド文学に典型的な修辞法が用いられる。冗長なほどにほぼ同様な変身の叙述が繰り返される。更に二度ウトゥの援けを受けてガゼルに変身し、老婆ベリリ(Belili)<sup>36</sup>のもとに遁れる。最後はウトゥを説得して姉ゲシュティナンナの羊の囲いに遁れようとするのだが、もはやなんの保護も無い荒野における姉の羊の囲いに悪鬼らが入り込むことで、ついにドゥムジは死を迎えることになる。

『ドゥムジの夢』は「夢解き」に始まり、「悪鬼の追跡」、「懇願と変身」さらに「裏切りによる拘留」そして「ドゥムジの死」というモチーフによって構成されている。これらの物語モチーフはイナンナ-ドゥムジ文学群と部

分的に共有されているといえよう。ドゥムジの死を友人の裏切りとするモチーフは、『イナンナの冥界下り』においても見られるように思われる。結果としてイナンナがドゥムジを身替りとして冥界に送ることは、妻が夫を裏切ることにもなるだろうから。

### 1.5. ダム作品群<sup>37</sup>

まだこれらのテキストの校訂本はないが、冥界にかかわる顕著な特色を持つこれらの作品を無視するわけにはいかない。これらの作品の主要な研究は Jacobsen によってなされた。Jacobsen によればダム関連作品は3つ認められるという、(1)「若草の荒野にて」<sup>38</sup>、(2)「ダムと彼の姉妹たち」<sup>39</sup>、(3)「主よ、大いなる高貴なる子、上において下においても上げられた者」<sup>40</sup>。

ダムは本来独立した氏神であったが、ドゥムジ神との近似性のゆえに後になると同一視されるようになる。つまり彼らは死に行く神であって、彼らの母や姉妹たちは（ある哀歌においてはツィルトウル (Širtur) の息子やゲシュティナンナの兄弟も）彼らの捜索にあたる。大筋でいえばこの作品群は冥界に下る彼らの捜索に携わるというイナンナ-ドゥムジ文学の伝承線上にあるといえる。ダムはさらにギシュバンダのニンギシュズィダ、エネギルのニナズやエサギクのアッラなどとの氏神ばかりでなく、ウル第三王朝の王たちの死後や続くイシン王朝の王の多くも死後ダム神と同一視される<sup>41</sup>。テキストによれば、元来ダム神の崇拝された都市はイシンで、母の嘆くこの世から遠くはなれた冥界に下る医術の神であった<sup>42</sup>。

物語は神の死の哀歌に始まる。長々とした哀歌に続いて、母と姉妹のダム捜索のモチーフに移る。

「わたしは産みの母です！  
 あの日、あの日は災いかな！  
 あの夜は災いかな！  
 わたしは若者（ダム）の母です！  
 ……

……。<sup>43</sup>」

母は冥界の使いの者どもが彼を拘束した日のことを思い起こす。葦原で息子を捜索した日のことを思い返す。

「わたし、若者の母、は葦原から葦原へと行こう、  
わたし、君なる者の母、は葦原から葦原へと行こう<sup>44</sup>。」

しかし彼女は息子ダムを冥界の使いの者から取り戻すことはできずにいる。結局のところ母はもはや息子が天にも地にもいないのだと悟る。むしろダムは墓から捜索の困難さを警告し、墓に備えられる食べ物や水に言及する。

「もし求められれば、若者よ、不帰の道をおまえと共に歩もう。  
災いなるかな若者よ！若者よ、私のダムよ！」  
彼女は行く、彼女は行く、(死)の山腹へ向けて<sup>45</sup>。

それにもかかわらず彼女は冥界に赴くことになる。それも結果は空しかった。冥界では息子でさえ母への応答は許されない。このテキストの締め括りにおいてダムの姉妹は行動を起こす。つまり彼女は冥界でダムと会い、挨拶を交わすことになる。

「わたしの弟よ、目に見えて茂って成長する、目に見えて茂って実をつける者よ、  
誰があなたの妹でしょう。わたしが妹です！  
誰があなたの母でしょう。わたしが母です！<sup>46</sup>」

ダム捜索のモチーフは断片的テキストにおいて展開される。ダムの妹は、川の堤に沿ってダムを追いながら、冥界の門に向かう。物語は乾季がやっ

て来ていたことを描出する。

冥界の川は水を流れさせない。その水は渴きを満たすことがない。

冥界の野は穀物を育てない。その粉は挽かれることがない。

冥界の羊は毛をもたない。そこから衣服は紡がれない<sup>47</sup>。

冥界の門にたどり着き、門を開けようとするが不可能であった。ダムは荒野に置き去りにされる。彼の妹も彼を離れる。

作品2はまず二人姉妹が冥界に向けようとする舟に気づくことから始まる。彼女たちはその舟の中にダムを発見する。舟は冥界に漕ぎ出そうとするところで、姉妹と舟守りである悪鬼との対話が続く。姉妹は執拗に身代金として飾り物や宝石を差し出し、一緒に冥界に向けて舟を漕ぎ出そうとする。しかし結局のところ姉妹と弟は共に冥界に達することはできなかった。ダムはただ一人で冥界に到達する。そこでエレシュキガルの息子、おそらくニナズ<sup>48</sup>、によって囚われの身から自由にされ、役人になる。この作品群は校訂されておらず、欠損部分が多くいが、結びの部分はイナンナ-ドゥムジ文学伝承の中で際立っている。

恐らく作品3は讃歌の様式をとっており、ダム神の冥界からの帰還を祝ったものと思われる<sup>49</sup>。

#### 1.6. イナンナとビルル<sup>50</sup>

4 欄 187 行から構成されるこの作品はウルクにおけるイナンナ-ドゥムジ文学の主題を共有する神話である。第1欄のようにテキストの欠損が20行にたっするところもあるが、多くの他のドゥムジテキスト同様、物語はドゥムジの死とそれを嘆くイナンナという共通したモチーフをもつ。しかし、この作品はある一点で他のドゥムジ関連テキストと異なる。たいていドゥムジ文学の場合、ガルラ悪鬼がドゥムジを殺害することになるが、この作品では彼の死はエデンリンリラの老婆ビルル (Bilulu) とその息子ギルギレ (Girgire) そしてシッル (Sirru) によってもたらされる。



物語はドゥムジの嘆きに始まり、またドゥムジの嘆きで閉じられる構成をとる。若き夫ドゥムジは妻イナンナと離れて荒野で羊の群れを世話する。イナンナは孤独のゆえに涙し、彼の名を呼ぶ。

「浄らかな（言葉を話す）口、優しい眼差しのドゥムジよ！」  
涙ながらに彼女はすすり泣く、  
「浄らかな（言葉を話す）口、優しい眼差しのドゥムジよ！」  
若者、夫、主人にして、（甘味の）ドイツ、  
ドゥムジよ！」彼女はすすり泣く、  
涙ながらに、彼女はすすり泣く<sup>51</sup>。

ドゥムジの羊の囲いは突如ビルルとギルギレの襲撃に会い、ドゥムジは斃れる。僕はイナンナに夫は頭を砕かれ斃れたと告げる。イナンナは悲しみと復讐というより、打ち殺された彼の死に愛おしさと誇りをもって賛美する。

浄かなイナンナがドゥムジに歌を編んだ、ドゥムジに歌を作った、  
「安らかなるあなたよ、安らかなる羊飼いよ、あなたは彼ら（羊）の見張をした、  
ドゥムジよ、安らかなる人よ、あなたは彼らの見張をした、  
アマウシュムガランナ（Ama-ušumgal-anna）よ、安らかなる人よ、  
あなたは彼らの見張をした、  
日が昇るとともに、あなたは私の羊の見張をした、  
夜が来るとともに、あなたは私の羊の見張をした！<sup>52</sup>」

エデンリラのギルギレの家では奪った群れを囲いに入れ、穀物は蓄えられる。やがて収穫が終り終るころ、復讐に燃えたイナンナはドゥムジがより安らかであるようにと、呪いをもってビルルを荒野の旅人が使用するような水を入れる皮袋にしてしまう。

浄らかなイナンナは居酒屋に入った、座席を踏みつけ、運命を定めた。  
「立ち去れ！わたしはおまえたちを殺したのだ、まことに、  
そして一緒におまえたちの名前も消し去ったのだ。  
おまえたちが荒野の冷水を入れる皮袋になるように！<sup>53</sup>」

ビルルとギルギレとは荒野の悪霊とされる。シッルは荒野に立って粉の奉物を数える(?)。荒野を彷徨するドゥムジに水が注がれ粉が撒かれるときには、悪霊たちは呼び出される。物語はテキストの破損はあるが、イナンナとゲシュティイナンナによるドゥムジの嘆きで終える。

「わたし（イナンナ）はあなた（ゲシュティイナンナ）とともに歌おう。  
ドゥムジの嘆きを、嘆きをあなたに、嘆きをあなたに！  
「わたしはあなたとともに歌おう。嘆きをあなたに、嘆きをあなた  
に！<sup>54</sup>」

### 1.7. ドゥムジの死<sup>55</sup>

ドゥムジに関わるテキストはたいてい神話や哀歌の様式をとって牧神ドゥムジの死をめぐる展開される。その意味ではまさにドゥムジの死を直截にテーマにした哀歌調の作品である。

作品は、ドゥムジが荒野でガルラ悪鬼に追跡され、死に追いやられる点で、他のドゥムジ関連テキストと同様であるが、彼がエレシュキガルの神殿に仕掛けられたギシュブル<sup>56</sup>罾にかかって捕らえられて、埋葬されるという点で独自性をもつ。

その日、女王は彼（ドゥムジ）の命を救うことなく、  
彼女は彼を〔代理として〕不帰の国へ渡したのだ。  
ウシュムガランナ（Ušmgalanna）の配偶者は彼の命を救うことなく、  
彼女は彼を〔代理として〕渡したのだ。  
ドゥムジはエシュラム（神殿）でギシュブル罾に〔しっかり捕まえ〕

られた。

彼はエレシュキガル [の] エシュラムでギシュブル罫に [しっかり捕まえ] られた。

食べ物はあるが、食べられるものではなかった。ギシュブル罫に [しっかり捕まえ] られた。

飲み物はあるが、飲まれるものではなかった。ギシュブル罫に [しっかり捕まえ] られた<sup>57</sup>。

またテキストの破損もあるが、墓所の周辺には嵐が渦巻き、ドゥムジはその大雨と南風（邪風）によって墓所に呑み込まれる。冥界の入り口を具体的に荒野に設けられた墓所、墓石とすることも他の作品に見られない特色である。

わたしの足は掘られた墓へと滑り込んだ。そこからわたしを [引き上げ] させてくれない。

墓石が大きな扉として置かれている。そこからわたしを [引き上げ] させてくれない。

渦巻く風に注ぎこむ雨の中へと滑り込んだ。そこからわたしを [引き上げ] させてくれない。

嵐がわたしを対岸へと運んだ。そこからわたしを引き上げさせてくれない<sup>58</sup>。

### 1.8. ギルガメシュの死<sup>59</sup>

この物語は『冥界のギルガメシュ』とも言われる。そう名称される所以はギルガメシュが冥界で様々な神々に対する献納にあづかっているからである。Kramerの校訂テキストではAとBの二つのセクションより構成されるが、残念ながら両者ともテキストの破損が甚だしい。にもかかわらず、シュメール文学における冥界の概念や叙述について大きな示唆を提供してくれる。

ギルガメシが冥界に下る理由は神々の父エンリルの決定によるものであった。たとえギルガメシュがクツラブ（Kullab）の王といえどもエンリルは彼に永遠の命をさづけなかった。作品の大部分は死がいかに避けがたいものであるかを叙述する嘆きの詩に割かれる。

人の闇の日がおまえにやってきた……  
……黒い波がおまえにやってきた……  
逃れえない戦いがおまえにやってきた、  
比類なき闘いがおまえにやってきた、  
免れえない衝突がおまえにやってきた<sup>60</sup>。

この「避けがたい死」というテーマは古代メソポタミア文学の傑作である『ギルガメシュ叙事詩』のクライマックスに置かれているテーマでもある。ギルガメシュに死の運命が割り当てられた後、民たちによる悲歌が歌い始められる。

今年度をもって三名の碩学の師、菱川先生、千葉先生、村山先生、が人文学部を退職されることになった。先生方の情熱と挑戦なしに本学部の創設も発展もありえなかったに違いない。先生方の残された功績をしっかりと踏襲し、今後もご指導とご鞭撻をいただきたいと願うものである。創成期の先生方のお働きを思い、人類最古の文学といわれるシュメール文学の一端を紹介することで、ささやかながら先生方への感謝をあらわしたい。

また退職を目前にして池田先生は逝去された。闘病の最後の最後まで教育と研究に身を置いた稀有の老師であった。爽やかな笑顔と細やかな心遣いを忘れまい。ご冥福を衷心よりお祈りする。

## 注

<sup>1</sup> シュメール・アッカド文学の分類については D. O. Edzard & W. Röllig, “Literatur,” *RLA* 6 (1983) 33-38; R. Borger, *Handbuch der Keilschriftliter-*

- atur* II: (Berlin, 1975)を参照。以下、文学上の分類については *RLA* に従う。但し使用言語の相違がこの地域（メソポタミア）における冥界モチーフの文学的特徴を必ずしも描出するわけではない。
- <sup>2</sup> 杉勇編『古代オリエント集』世界文学が大系1（筑摩書房，1977年）に所収されている。以下本書の言及は『古代オリエント集』と表記する。
  - <sup>3</sup> 最近個々のシュメール文学ではなく、これらの文学資料からシュメール人が冥界に関する包括的な研究書が出版された。D. Katz, *The Image of the Netherworld in Sumerian Sources* (CDL Press, 2003)。この種の本格的な研究は少なく、拙書 *The Netherworld in Sumero-Akkadian Literature* (Diss. Univ. of California, Berkley, 1991) 以来のものである。冥界という概念そのものは宇宙論と関係するが、これについても比較的最近のことであるが、古代メソポタミアの宇宙論を取り扱った研究がなされた。W. Horowitz, *Mesopotamian Cosmic Geography* (Eisenbrauns, 1998)。筆者は幸い2000年へブル大学においてホロヴィツ氏に会い、冥界について議論する機会があった。
  - <sup>4</sup> ここではシュメール語で書かれた作品群を指す。シュメール語の文法や語彙について十分解明されているとはいえないこともあり、訳文については概ね碩学の研究者の校定本によった。
  - <sup>5</sup> テキストの校訂は W. R. Sladek, *Inanna's Descent to the Netherworld*; (dissertation, Johns Hopkins University, 1974) を参照。このテキストの校訂と編集については S. N. Kramer の貢献が大きい。“Inanna's Descent to the Nether World” *JCS* 4 (1950) 199-211; *JCS* 5 (1951) 1-17。Kramer の更なる校訂は “Sumerian Literature and the British Museum: the Promise of the Future,” *PAPS* 124 (1980) 299-310 に見られる。その他、Kramer の初期の校訂に基づいてはいるが、このテキストの解釈と注釈に欠くことのできない研究として A. Falkenstein “Zu 'Inannas Gang zur Unterwelt'”, *AfO* 14 (1941/44) 113-138 がある。校訂史については Sladek, *op. cit.*, 1-8 頁を参照。Kramer による翻訳は J. Pritchard の *ANET* (New York, 1961) 52-57 頁と *The Sacred Marriage Rite* (Bloomington, 1969) 107-121 頁に所収されている。Th. Jacobson は *The Treasures of Darkness* (New Haven, 1976) 55-63 頁において、シュメールにおける自然界と植物環境の特徴からこのテキストの解釈を展開する。邦訳と解説については五味徹『古代オリエント集』23-36 頁参照。
  - <sup>6</sup> 後述アッカド語テキストの中で取り上げる。

- <sup>7</sup> 注4を参照。
- <sup>8</sup> Jacobsenによれば、ドゥムジ物語における穀物の神(春の収穫)は収穫の後、直ちに冥界に下る。秋に収穫される葡萄の女神であるドゥムジの姉妹ゲシュティナンナは兄弟ドゥムジの後を追ひ、彼を冥界で発見する。テキストが破損しているため不確かではあるが、残存する物語からいえそうなことは、イナンナはそれぞれに半年間相互に冥界に留まるよう運命を割り当てる。更に仔細な議論については Th. Jacobsen, *Treasures*, 62 頁参照。ドゥムジからタムズへのカルトの継承については, S. Langdon が *Mythology of all Races*, ed., C. MacCulloch (New York, 1964) 336 頁で詳述している。「シリア域内のハランにおいてサバ人 (Ssabaeen) として知られるアラビアの宗派は 10 世紀ごろまでこの神の礼拝を遵守していた。そこではその名はタムーズ (Tamūz) とかタウーズ (Ta-ūz) と呼ばれていた。タウーズ祭はまた嘆く女性の祭りとしても知られ、タムズ月の第一日目に執り行われた。ハラン宗派の女性は、王が殺害し、その骨を砕き、風に向かって撒き散らかされるタムズを嘆いた。……したがって、この祭りの間、女性は石臼で挽かれたものを口にすることができなかった。」(S. Fiore, *Voices from the Clay* (Norman, 1965) 63 頁を参照)。この物語が関係すると思われる祭儀的背景の研究は G. Buccellati, “The Descent of Inanna as a Ritual Journey to Kutha?” *Syro-Mesopotamian Studies* 4/3 (Malibu, 1982) 1-7 頁によってなされている。彼の指摘によれば、アッカド語版は冥界の異名として都市名クサ (Kutha 前面 40 行目)、また祭儀的背景において女神像に言及するテキストがある (43-46 行)。文学的・祭儀的背景については W. W. Hallo, “The Cultic Setting of Sumerian Poetry,” *CRR* 17 (Brussels, 1970) 119, と Th. Jacobsen, “Religious Drama in Ancient Mesopotamia,” in *Unity and Diversity*, eds., H. Goedicke and J. S. M. Roberts (Baltimore, 1975) 66-67 頁を参照。
- <sup>9</sup> 神名の語源や性格についてはそれ自体明らかでない場合もあるが、シュメール・アッカド文学に出てくる主要な神々については D. O. Edzard, “Die Mythologie der Sumerer und Akkader,” in H. W. Haussig, ed., *Götter und Mythen in Vorderen Orient*, *Wörterbuch der Mythologie* 1 (Stuttgart, 1965) を参照。G. Leick, *A Dictionary of Ancient Near Eastern Mythology* (London, 1991) 86 頁 figures 29, 42, 43。
- <sup>10</sup> 五味亨訳「イナンナの冥界下り」72-76 行, 前掲書『古代オリエント集』26 頁。
- <sup>11</sup> 同書, 333-341 行。
- <sup>12</sup> ドゥムジは捕らえられ、身代わりとして冥界に送られるとするモチーフは『ギ

ルガメシュ叙事詩』第6の書板でイシュタル女神（シュメールのイナンナ女神）は英雄ギルガメシュに恋をし、思いを伝えようとする。しかしギルガメシュはイシュタルがいかに不実であったか一連の例を挙げているのだが、「ドゥムジのために、毎年泣くことを定めたのだ」（第2欄1-3）とこの箇所を援用する。この描写はドゥムジの死を悼む儀礼を背景にしていると思われる。

<sup>13</sup> 「イナンナの冥界下り」, B 10-15 行。

<sup>14</sup> 校訂本は A. Shaffer, *Sumerian Sources of Tablet XII of the Epic of Gilgameš* (Diss., University of Pennsylvania, 1963) である。部分訳として、S. Kramer, *The Sumerian* (Chicago and London, 1963) 197-205 頁がある。A. Koefored, “Gilgameš, Enkidu and the Nether World,” *ASJ* (1983) 17-23 頁。このテキストのアッカド語テキスト部分の邦訳がある。月本昭男『ギルガメシュ叙事詩』（岩波書店、1996年）158-170 頁。

<sup>15</sup> *Th. Jacobsen, Treasures*, 212-215 頁。

<sup>16</sup> “The Epic of Gilgamesh Tablet XII,” *RA* 30 (1933) 127-143 頁。

<sup>17</sup> イナンナによってフルップの樹から作られる。これらはイナンナからギルガメシュに贈られたものである。ブックは樹の根っこから作られ、メックーは樹の枝から作られる。これらが何を意味するのか、諸説ある。ホッケーのようなスポーツで使用されるパック（ブック）とスティック（メックー）と解する研究もある。Anne D. Kilmer, “A Note on an Overlooked Word-Play in the Akkadian Gilgamesh,” in G. van Driel, ed. et al., *Zikir-Šumim, Festschrift F. R. Kraus* (Leiden, 1982) 128-132 頁。

<sup>18</sup> A. Shaffer, *op. cit.*, 175-183 行。

<sup>19</sup> アッカド語訳では冥界の王ネルガルである。

<sup>20</sup> A. Shaffer, *op. cit.*, 255-267 行。

<sup>21</sup> *ibid.*, 292-294 行。

<sup>22</sup> *ibid.*, 302-303 行。

<sup>23</sup> 校訂版は H. Behrens, *Enlil und Ninlil, Studia Phol* 8 (Rome, 1978) による。この書評については、J. Cooper, *JCS* 32 (1980) 175ff. 頁参照。翻訳は S. N. Kramer, *Sumerian*, 145ff. 頁と Th. Jacobsen, *Before Philosophy* (New York, 1949) 165-170 頁がある。後者は山室静・田中明訳『古代オリエントの神話と思想』（社会思想社、1978年）186-192 頁参照。

<sup>24</sup> *Enlil und Ninlil*, 13-20 行。

<sup>25</sup> *ibid.*, 65-77 行。

<sup>26</sup> *ibid.*, 85-86 行参照。

- <sup>27</sup> これについては J. van Dijk, *SGL* II 71-78 頁を参照。
- <sup>28</sup> 例えば, AN: *Anum CT* 25 8-15 行。MSL 4, 102-106 行；『イナンナの冥界下り』86 行；『ギルガメシュ, エンキドゥと冥界』201 行；エネギルにおけるニナズに奉献された神殿讃歌 *TCS* 3 4 行参照。
- <sup>29</sup> 例えば, エシュメンナにおけるニナズに奉献された讃歌 *TCS* 3 20-21 行。
- <sup>30</sup> このテキストの校訂と翻訳は, B. Alster, *Dumuzi's Dearm, Mesopotamia* 1 (Copenhagen, 1972)。神話作者にとって, イナンナ-ドゥムジ崇拜は求婚と婚礼と並び死と嘆きのモチーフをもつ生産的文学活動の場であった。既に前述した『イナンナの冥界下り』は同類型の文学作品の一つである。ドゥムジの死と嘆きに関連して主要な三つの文学作品が認められる。すなわち『ドゥムジの夢』, 『ドゥムジの死』と『ドゥムジ哀歌』である。宗教現象としては, ダムテキストはイナンナ-ドゥムジ崇拜と分離し難いほど相互関係が深い。後のドゥムジ伝承では, ドゥムジとダムは同一視されるが, 起源的には個別に存在した。したがって, それらは独立した文学作品と見なされよう。類似した宗教儀礼をもつにしても, 文学単元がそれぞれの名称を伴って存在する以上, ドゥムジテキストはダムテキストと個別に取り扱われるべきであろう。
- 初期のドゥムジ崇拜研究に S. Langdon, *Tammuz and Ishtar* (Oxford, 1914); M. Witzel, *Tammuz-Liturgien und Verwandtes, Analecta Orientalia* 10 (Roma, 1935); K. Frank, *Kultlieder aus dem Ishtar-Tammuz-Kreis* (Leipzig, 1938) と M. Moortgat, *Tammuz: der unsterblichkeitsglaube in der Altorientalischen Bildkunst* (Berlin, 1949) などがある。これらは既に古いものであるが, 文献として参照する価値はある。ドゥムジテキスト研究に多大な貢献をしたのは Jacobsen であろう。彼の論文集 *Toward the Image of Tammuz and Other Essays on Mesopotamian History and Culture* ed., W. L. Moran (Harvard Univ. Press, 1970) と *Treasures* はイナンナ-ドゥムジテキストを系統的に整理し再構成を試みている。Kramer も *The Sacred Marriage Rite* (Bloomington, 1959) : 小川英雄, 森雅子訳『聖婚——古代シュメールの信仰・神話・儀礼』(新地書房, 1989 年) と『イナンナの冥界下り』などにおいてこのテキストを取り扱っている。
- <sup>31</sup> Alster はしばしば『イナンナの冥界下り』からの平行するか類似する部分を引用する。特に 84-122 行の注釈を参照。
- <sup>32</sup> *Dumuzi's Dream* 60-65 行。
- <sup>33</sup> *ibid.*, 140-143 行。
- <sup>34</sup> 変身のモチーフは好んで使用された。『イナンナの冥界くだり』や『エンリル



とニンリル』参照。

<sup>35</sup> *Dumuzi's Dream* 165-174行。

<sup>36</sup> アッカド語による『イシュタルの冥界下り』(CT, 15, pl. 47, 51-55) ドゥムジの姉妹として言及される。RLA 1, 479頁参照。

<sup>37</sup> この作品群の基本テキストは Zimmer, *SK* nos. 26, 27, 45; de Genouillac, *Premiere Recherches archéologiques à Kish* (Paris, 1924-5) vol. II. D 41, C 108, C 8; Cros, *Nouvelles Fouilles de Tello*, 206 (AO 4328)。関連テキストと翻訳は Th. Jacobsen, "Religious Drama in Ancient Mesopotamia," in *Unity and Diversity* eds., H. Goedicke and J. J. Roberts (Baltimore, 1975) 65-97頁と *Treasures* 63-67頁さらに *Toward the Image of Tammuz* (Cambridge, 1970) 324-327頁の注 8-16を参照。

<sup>38</sup> Edin-na ú-sag-gá は B. Alster による校訂と解説がある "Reconstruction, history, and interpretation of a Sumerian cultic lament." in *Keilschriftliche Literaturen*, BBVO 6 (1986) 19-32頁。この基本テキストは SK 26, 27, 45 と AO 4328。

<sup>39</sup> このテキストは「冥界のダム」とも呼称される。テキストは UM 29-16-222 裏 (未刊行)。Alster 同上 27頁と Jacobsen, *Treasures*, 7-68頁参照。

<sup>40</sup> 3つの版が存在する。TRS 8 (*TCL* 15 8:64 ff.), CT 15 pls. 26-27 と pl.30。Jacobsen, *Treasures*, 68-72頁参照。

<sup>41</sup> SK 26. vi. 19-28; vi-vii; 27. ii。Th. Jacobsen, *Image of Tammuz* 324頁参照。

<sup>42</sup> Th. Jacobsen はギルス市を提案しているが (*ibid.*, note 3), 場所は確認できていない。S. N. Kramer, *Sacred Marriage* 158頁注 45参照。

<sup>43</sup> Th. Jacobsen, *Treasures*, 64頁。

<sup>44</sup> *ibid.*

<sup>45</sup> *ibid.*, 66頁。

<sup>46</sup> *ibid.*

<sup>47</sup> *ibid.*, 67頁。

<sup>48</sup> *ibid.*, 68頁。

<sup>49</sup> ダム作品群は彼が冥界から帰還することに直接言及していないけれども、『イナンナの冥界下り』などのイナンナ-ドゥムジ文学伝承に立つ物語からして、この世への帰還が果たされたものと推測できよう。

<sup>50</sup> 校訂と翻訳については Th. Jacobsen, *JNES* 12 (1953) 160-187頁と S. N. Kramer, *JNES* 12 (1953) 187f. 頁を参照。ビルル神はシュメール・アッカド

文学にはほぼ出てこないが、男神 Enbilulu（主なるビルル）は例証し得る。AN:*Anum* テキストではバビロンの天候神 Adad と同一視される。Jacobsen はビルルが水と関係すると指摘（*ibid.*, 167 頁）する。

D. O. Edzard, “Die Mythologie” 56 頁参照。

<sup>51</sup> *Inanna and Bilulu*, 30-35 行。

<sup>52</sup> *ibid.*, 82-87 行。

<sup>53</sup> *ibid.*, 106-111 行。

<sup>54</sup> *ibid.*, 176-177 行。

<sup>55</sup> S. N. Kramer, “The Death of Dumuzi: A New Sumerian Version,” *AnSt* 30, 5-13 頁。

<sup>56</sup> CAD G 100 gišburru 参照。 *Pennsylvania Sumerian Dictionary*, búr/bâr.

<sup>57</sup> *The Death of Dumuzi*, 51-56 行。

<sup>58</sup> *ibid.*, 40-43 行。

<sup>59</sup> テキストの校訂と翻訳は S. N. Kramer, *BASOR* 94 (1944) 2-12 頁; *ANET* (1955) 50-52 頁を参照。また, A. Falkenstein, *RLA* III 363 頁; Th. Jacobsen, “Death in Mesopotamia,” in *Mesopotamia* 8 (1980) 19-24 頁を参照。

<sup>60</sup> A 40-45 行。 Th. Jacobsen, *Mesopotamia* 8 (1980) 19 頁参照。

学術雑誌, 存続刊行物, 楔形文書集ほか, 略記号については下記を参照。

(1). *The Assyrian Dictionary of the University of Chicago*, ed. E. Reiner, et. al. (Chicago-Glückstadt, 1956-1989.); (2). W. von Soden's *Akkadisches Handwörterbuch* (Otto Harrassowitz, 1965-1981.); (3). R. Borger's *Handbuch der Keilschriftliteratur* vol.I (Berlin, 1967) 661-672 頁。